

大和鋼業の課題と展望

津井田 照久社長に聞く

厚板溶断から溶接・製罐・塗装まで一貫で手掛ける総合鋼板加工メーカー、大和鋼業（本社・大阪府松原市、社長・津井田照久氏）は22年5月期、売上高・利益ともに過去最高となった。今期は松原（本社）・南港・富田林・咲州の4拠点の合理化や「見える化」に向けた取り組み、人材育成などに力を注ぐ。同社の課題や展望について津井田社長に聞いた。

（綾部 翔悟）

——22年5月期が最高 計上したことで最高益と益となった要因とは。 なったが、実力ベースで「メーカーの値上げにはない。前期は受注量が先駆けて市況の追い風も 堅調に推移した中で、コロナ禍で当社従業員が濃



厚接触者となりマンパワー不足に陥った工場もあった。しかし多能工化を推進したこともあり加工量の落ち込みは軽微だった。

——多能工化が功を奏

している。

「社内講習などを通して業務の見える化・共有が促え、対策を考えることになった。多能工化によりコロナ禍で人員や必要な設備の更新など、多能工化を図るとともに、課題を一人ひとりが捉え、対応を考えることになった。また、当社が少なくなった時でも最

は社員一 終的な数値はそれほど落ちてきている。検討し、随時人ひとり ちていなかった。社員の 進めていく方針」

——足元を含めた今期 影響などにより、南港や 担当以外の」

にプラス ——多能工化以外にも 相場も足元では頭打ち感

ワンの担 注力している。 エネルギ

当を設け 「会社として今期は、 非効率を生み出すポトル

る「副担 業務の見える化・副担当 ーや物流コストが増加し

当制』を 制・ムダの改善（3S活 ており、スプレッドは縮

敷いてい 動）・1人当たりの出荷 小している。部品供給網

る。これ の重量増を重点項目とし の一時的な停滞により当

により、 ている。現状の業務・数 社のユーザーである建機

属人化を 値を理解して社員が共有 関連に陰りが出ている。

なくして することで課題も見えて 精彩を欠く中国経済や米

く。課題を一人ひとりが 国の住宅着工数減など

が捉え、 対策を考えるこ も遅れながら間接的に当

多能工 ことで、効率化すべき作業 社の受注に影響している

と考えている」 「ただ国内生産してい

るミニ建機などは底堅 務にいそしめば自ずと良

い。物量感でも足元は通 い成績・業績に結び付く。

常時の5〜10%程度の減 感じて、やりがいを感じ

少で、前期ほどの業績と てさらに研さんを積もう

はいかないがそこそこ のと思えるだろう。経営者

数字を見込んでいる」 として良いサイクルを創

「副担当制」で多能工化推進

ボトルネック解消し厚板加工効率化

——課題とは。 「各拠点で入荷から出

を追求していきたい」

